

今、振り返る教師としての原点

私を育てた
あの時代、あの出会い

己をあらわにぶつかることで 教師の幹を少しずつつ太くした

奈良県立奈良高校

四方敏幸しかた

教師のひと言が生徒のその後を大きく変えることは決して珍しくない。だが、どれだけ用意周到であっても、教師の想定通りに事が進むとも限らないのも事実だ。生徒とぶつかり、失敗と成功を重ねながら成長する道を選んだ四方先生の覚悟を振り返る。

「生徒に遠慮するな」



新任で奈良県立郡山高校に赴任し、小林勢治先生のクラス

の副担任になりました。残り9歳年上の小林先生は当時33歳。生徒と気軽に言葉を交わしながら厳しさも忘れないその姿勢に、「私もこんな教師になりたい」と心から思いました。郡山高校の生徒はとても素直で、私の授業にも真剣な態度で臨んでくれました。生徒はついてきてくれている……私はそう思っていました。ところが2学期のある日、私は笑顔の小林先生に声を掛けられたのです。「遠慮しないで、もっと自然体で生

徒に接したらええのに。生徒もそう言うとするで」。正直、最初は小林先生の言葉を素直に受け入れることは出来ませんでした。しかし、冷静にそれまでの自分を振り返ってみると、生徒との関係を円滑にしたいあまりに、生徒に気を使い過ぎていたことに気が付いたのです。確かに私は、「この言い方なら生徒はちゃんとやってくれるだろう」と考えてから、生徒にひと声掛けていました。生徒に真摯に向き合っていたものの、生徒からの反応を楽しむような余裕もなかったのです。

小林先生のひと言をきっかけに、私は「郡山高校のような学校では、用意周到でなくてもいいから、もっとストレートに思

いぶつけた方が、生徒からいろいろな反応があり、コミュニケーションが豊かになるのかもしれない」と考えるようになりました。そして、いつの間にか自分の気持ちが無くなっていくことに気が付いたのです。

衝突が絆を強くする

その年の文化祭では、1年生9クラスの中で、小林先生のクラスが正門を飾るアーチの製作を担当することになりました。それは文化祭の顔をつくるとても大切な役割です。

副担任の私は、生徒と一緒に頑張って作業に汗を流しました。小林先生は、時折生徒にアドバイスするくらいでしたが、時間の経過と共にクラス全員に役割

が生まれ、協調性のある集団になっていくのが手に取るように分かりました。教師の存在を過度に感じさせず、しかし生徒を確実に変えていく働き掛けなど、クラス運営のあり方を学ぶ貴重な機会になりました。

文化祭に対する生徒の情熱は格別でしたから、時には衝突もありました。実は私も、リーダーの生徒とかなりもめてしまいました。彼らがよかれと思ってやっていたことに、私がストップをかけたことが原因です。生徒の言い分もとてもよく理解できましたから、どう説明すれば彼らに分かってもらえるだろうかとずいぶん悩みました。

生徒との関係がしっくりしないまま文化祭当日を迎えまし

先輩教師の言葉

失敗と成功を
積み重ねることなしに
幹は太くならない

奈良県立奈良高校 校長
小林勢治せいじ



四方先生に「遠慮するな」と言ったのは、「四方先生には思ったことを言うてもらいたい」という生徒の言葉を聞いたからです。郡山高校の生徒は1年生でも結構大人ですから、四方先生が遠慮していることを感じ取ったのでしよう。また、担任の私が、ずけずけとものを言うので、そのギャップもあったかもしれませんが、ともかくそれ以降、四方先生は変わりました。

生徒とのかかわりは静かな水面に石を投げる行為と同じです。波紋を起こすことで水質や深さなどが分かります。自分をあらわにしてぶつかって、教師は生徒を真に理解することが出来るのです。私も、「別の言い方、接し方が

左 こばやし・せいじ 体育科。奈良県立王寺工業高校、郡山高校、奈良県教育委員会、奈良県立教育研究所を経て、奈良高校へ。校長。

右 しかた・としゆき 数学科。奈良県立郡山高校、高円高校、奈良県教育委員会、奈良県立教育研究所を経て、奈良高校へ。進路指導部長。

撮影◎奈良高校にて



た。出来上がったアーチを生徒と一緒に眺めた時は本当に感動しました。その後、生徒との関係は破綻するどころか、むしろより強固になりました。そして生徒を信じていることが出来るようになったことで、私も授業やSHRをこれまでよりずっと楽しめるようになったのです。あの衝突は生徒と私にとって、しんどかったけれども必要な経験だったのだと思います。

あれから25年以上が経ちました。小林先生とはその後、教育委員会、そして今は奈良高校で一緒に働かせてもらっています。今の私は、校内の意見をまとめる役目も多くなりましたが、校長である小林先生からは、「周りに気を使い過ぎや」とよく言われます。ズバリと指摘されてドキッとすることもありますが、

すが、はっきりと言ってくださるからこそ、私は小林先生の前では安心して自分を出せるのです。自分の性格を変えるのは簡単ではありませんが、それでも私は「小林先生のようになりたい」と今も強く思います。

とはいえ、小林先生と同じようにはなかなか出来ません。だから、若い先生と接する時に心掛けてるのは、自分の失敗を話すことです。「もっと早めに先生方にお願ひすべきだった」などと反省を隠さずに話すと、若い先生も意見を言ってくれます。きつと、私の失敗を自分に置き換えて考えてくれているのでしよう。「生懸命になるほど、反省もたくさんありますが、それは私が後輩に渡せる財産であり、それがあつた限り、私はまだ成長できると信じています。

あつたかも」といった反省はあります。しかしそれでも、教師は失敗を恐れず、機を逸することなく石を投げ続けなければいけません。生徒の反応を直に感じることは、教師としての至らなさに気付く機会にもなるのですから。

私は、若い先生が「失敗しないハウツー」を欲しがることが気になります。まず教育観、幹をつくってほしいのに、一足飛びに「どうしたらよいか」と聞いてくる。ハウツーは幹に付く枝葉に過ぎないこと、幹は失敗や成功を重ねないと太くならないことに気付けるかどうかで、教師としての成長は違ってくる。そうした気付きは、先輩との出会いが与えてくれるものです。

四方先生の遠慮は、周囲に対する配慮です。しかし、配慮し過ぎてアクションが遅れるのはいけません。行動を起こす前には配慮はしてよいけれど、アクションを起こすと決めたら、あとは躊躇せずに走る。だから「石橋を叩いていいのは一度だけやで」と四方先生によく話します。

性格はなかなか変えられませんが、自分をコントロールすることは出来るはずですよ。私たちはプロなのですから。